

サイクル対非サイクル：英語強勢分析の進化

小 野 浩 司

Cyclic vs. non-cyclic: Evolution of the analyses of English stress

Koji ONO

0. はじめに

英語の強勢分析は果たして進化したか。これが本論のテーマである。Chomsky and Halle (1968) (以下SPE) が英語の強勢型を詳細かつ体系的に分析して以来三十数年が経ち、その間の音韻理論の交替は目まぐるしいものがあつた。強勢に関してだけ言っても、標準理論、韻律理論、格子理論、語彙音韻論、最適理論などが次々に現れた。新たな理論の出現は新種のデータの発掘と、これまで例外と見なされたデータの説明をわれわれに期待させる。しかし、実際にこの期待は叶えられてきたであろうか。このような問いはSPEの出現以来数十年が経った今だからこそ問うに値するものと言える。もしその期待が叶えられていないならば、強勢の分析は衣だけが変わって、中身は以前と変わらないということになる。このような事態は明らかに進歩とは言えない。現在の強勢分析が過去の分析と比較して進歩しているかどうか、われわれはこの点を見極めなければならない。その上で、今後の研究の進むべき方向が決まるというものである。

本論では音韻論が扱う多種多様な現象の中でもとくに強勢の分析に的を絞って議論を進めるが、実は一口に強勢の分析と言っても、その中身はいろいろに分化している。たとえば、基底表示はどうするか、強勢は何段階まで認めるか、何種類の強勢弱化規則を認めるか、韻律外性は認めるかなど、さまざまである。しかし、これらすべてを詳細に検討することは本論の手に余るし、またそうすることでかえって焦点がぼけてしまう恐れがある。したがって本論では、強勢分析におけるサイクルの有無に的を絞り、この観点から音韻理論は進化したかどうかを問う。当該の理論がサイクルを利用するかしないかは、主に第2強勢以下の強勢 (subsidiary stress) を問題にするときに持ち上がる重要なテーマである。このテーマは強勢を扱うすべての理論にかかわるものであり、本論がサイクルに的を絞ったのはこの理由からである。また、サイクルは必然的に派生を含意するが、最近の最適理論が一切これを認めないことは周知の事実である。一体過去の膨大なデータをこの理論はサイクルなしでどのように処理しようとしているのか、この点も現代的なテーマとして本論の射程に入る。

1. 標準理論 (SPE)

サイクルという概念を最初に音韻論に持ち込んだのはChomsky, Halle and Lukoff (1956) であるが、本節ではその概念をさらに敷衍し、明確化し、その後の分析に大きな影響を及ぼしたSPEに焦点を当て、

サイクルが強勢付与に果たす役割を簡単に振り返る。¹ その上で、SPEの問題は何であったのかを再確認する。あらかじめ断っておくが、本節の目的はこの再確認ということであって、SPEの代案を提出することではない。なぜなら、本論の目標はあくまで音韻論の進化を調べることであって、何かの理論の代案を出すことではないからである。SPEの問題を再確認することで、それ以降に提案された理論との優劣の判定基準ができ上がり、それによって理論の進化が実際起こったかどうかが明らかになる、と考えるわけである。

さて、サイクルにまつわるすべての議論は、condensationとcompensationの対比から出発したと言っても過言ではない。すなわち、これらの語は線形的に全く同じCV構造をもちながら、前者の第2音節には強勢があるが、後者の第2音節には強勢がない。したがって、表層の形からではない、別の要因がこれらの語の違いをもたらしているということになる。そこでSPE、ひいては標準理論全体が着目したのがそれぞれの語の内部構造である。すなわち、con'densationはcon'denseという語が基底にあり、第2音節の強勢はその基底語の強勢を引き継いだと解釈するのである（コンマはその後ろの音節に強勢があることを意味する）。² 今述べたことを括弧を付けて表すと[[con'dense]ation]という表示になる。今かりにその内側の括弧([condense])を第1サイクル（あるいは内部サイクル）、外側の括弧([condensation])を第2サイクル（あるいは外部サイクル）と呼ぶと、condensationの第2音節に強勢が置かれているのは第1サイクル([con'dense])の強勢をそのまま引き継いだからということになる。³ サイクルを用いた強勢の分析とはこのように語の内部構造を考慮に入れる分析であり、内側のサイクルの強勢は保持されると考える分析方法である。また、「内部構造を考慮する」とは、語の派生を音韻分析において考慮するという事と同じ意味であり、この点は派生を全く考えない最適理論と一線を画す。さて、compensationに話題を移すと、この語の内部構造は[[compensate]ion]である。第1サイクル(compensate)の第2音節には強勢がないことから第2サイクルすなわち語全体の第2音節にも強勢がないことになる（下線の付いた音節はそこに強勢がないことを示す）。SPEはcondensation vs. compensationの対比のほかに(1)のような例も挙げている。(1a)では第1サイクルの強勢を第2サイクルでも保持していることがわかる。一方、(1b)では第1サイクルの語の下線部には強勢がないので、語全体としてもその音節に強勢は与えられない。

- (1) a. at'testaion [[at'test]ation] e'lasticity [[e'lastic]ity]
 b. demonstration [[demonstrate]ion] serendipity [[serendip]ity]

しかしながら、このようなサイクルを用いた強勢付与の方法には大きな問題があることもすでにSPEの中で指摘されている。ただし、その内容は限られており、反例として挙げられているものも(2)に見るようなものだけである。

- (2) information [[in'form]ation] transformation [[trans'form]ation]

(2)の例は構造上(1a)と変わらないにもかかわらず、内側のサイクルに含まれる強勢が外側のサイクルには受け継がれていないという点で、サイクルを利用するSPEの反例である。

この問題を解決すべく、SPEではこれらの語にはそもそも第1サイクルはないと仮定する。すなわち、informationの基底表示ははじめから/inform+At+iVn/の形をしており、強勢規則はこの基底表示全体に一度だけ適用されると仮定するのである。これにより、強勢規則は/A/に第1強勢を置くことができ、第2強勢を語頭に置くことができるようになる。つまり、誤って第2音節に強勢を付与することがなくなるの

である (cf. SPE: 112, 161)。このような方法で一応 (2) に関する問題は解けたかのように見えるが、(1)ではなく (2) に対してだけ内部サイクルを認めない根拠が不明のままである以上、このやり方がその場限りであるという印象は拭えない。

さて、上では (2) に対するSPEの取り扱いに問題があることを見た。ここでは別の観点から (2)がなぜ問題になるのかを考えてみよう。その観点とは音節の重さと強勢の関係である。一般に、音節が重たければそれだけ強勢が置かれる可能性は大きいと考えられている。逆に言えば、重たい音節には強勢を取り除く強勢削除 (stress deletion) 規則が適用されにくいと考えられている。⁴ しかし、(2) の第2音節は重音節 (heavy syllable) であるにもかかわらず強勢はない。問題はなぜ (2) の第2音節が今述べた一般的傾向に従わないのかということである。

言うまでもないことであるが、このような問題の解決をSPEに求めることはできない。なぜなら、SPEには音節という概念がそもそもないからである。したがって、この問題はSPE以降の、しかも音節構造を考慮に入れる理論の問題ということになる。本論の課題は、それらの理論が (2) のような語をどう処理してきたかを調べ、果たして本当に重音節には強勢削除規則が適用しにくいのかを見極めることである。なお、このような課題がサイクルと密接に関係しているのは言うまでもない。

2. 格子理論

さて、標準理論の概要がわかったところで、これから先は標準理論以降に現れた理論がそれを乗り越えたかどうかを調べる。最初にHalle & Vergnaud (1987) (以下H&V) に代表される格子 (grid) を用いて強勢を導く格子理論を取り上げ、次に現在盛んに研究されている最適理論 (Optimality Theory) を取り上げる。⁵ 格子理論はH&Vのほかにも、Prince (1983), Halle & Kenstowicz (1991), 原口 (1994) などがある。

H&Vにおける強勢付与の仕方がSPEのそれと著しく異なることは周知のとおりである。たとえば、語を音節の連続と見なすこと、その音節をフットにまとめ格子(grid)を組み立てること、一群のパラメーターと原理により強勢を付与すること、韻律外規則 (Extrametrical Rule) やアクセント付与規則 (Accent Rule) を設けたこと、これらすべてはH&VにあつてSPEにはないものである。しかし、サイクルに限って言えば、両者は同じ視点に立っているということが出来る。H&VもSPE同様、派生語の強勢を割り出すために、まず基底語に強勢を与え、それから派生語全体に強勢を与えるという手順をとる。実際、H&Vにおけるcondensation (1a) とcompensation (1b) の扱いは、SPE同様、前者には[[condense]ation]という構造を与え、後者には[[compensate]ion]という構造を与え強勢の位置を計算している (H&V: 248)。このことからH&VがSPE流のサイクルを用いていることは明白である。

さて、ここまで見てくると、H&Vがcondensationとinformationの振る舞いの違いをどう処理したかは容易に推察できるであろう (なお、この違いをSPEではうまく説明できなかったことを思い出していただきたい)。H&VはSPEとは理論の枠こそ違え、強勢付与の基本姿勢は同じであった。そこで、condensationに対しては内部サイクルを与え(すなわち ([[condense]ation])), con'denseの強勢がcondensationの段階になっても保持されると考えるのである。強勢を保持する規則は強勢複写規則 (Stress Copy) と呼ばれ、前のサイクルの強勢を今のサイクルにコピーする役割を果たす (H&V: 219)。一方、informationに対しては内部サイクルを認めず (すなわちSPE同様、/inform+at+ion /を基底表示と考える)、強勢規則をこの基底表示全体に一度だけ適用する。こうすることで強勢複写規則の適用を免れることができ、informationの第2音節に強勢が置かれることもなくなる (H&V: 251)。

しかし、(1a)と(2)に対するH&Vのこのような処理の仕方は、基本的にSPEの考え方を踏襲しているの

であるから、この理論がSPEと同じような批判を受けることもこれまた当然と言えよう。すなわち、condensationとinformationはどう解釈しても同じ接尾辞をもち、同じ派生の過程を経ているのであるから、当然同じ対処の仕方をしなければならないにもかかわらず、H&Vでは、一方は内部サイクルを認め、他方は認めないという一貫性のない分析をしているのである。この点でH&VはSPEと何ら変わらず、SPEの問題をそのままのかたちで残している。したがって、H&VはSPEより進化したとは言えない。⁶

もう一つH&Vで興味を引くのは、第1強勢の前の重音節 (heavy syllable) は一般に強勢が保持されると考えている点である (H&V: 251)。これはつまり、下の (3) の例のほうが (4) の例よりも数的に優位である (言い換えれば、無標である) ということの意味する。

(3) an'nexation con'densation de'portation ex'portation re'laxation

(4) affirmation confirmation conservation information preservation

(3) は (1a) と同じ振る舞いをし、(4) は (2) と同じ振る舞いをする。H&Vの観察によれば、第1強勢(これは常に接尾辞 -ationの第1音節に置かれる)の前の重音節に強勢複写規則が適用されるほう(すなわち、(3))が無標であるということになる。しかし、後でも述べるが、この点はPater (1995) の見解と大きく違う。Paterはむしろ (4) のほうこそ無標であると主張する (Pater 1995: 42)。いずれの主張が正しいかは今後さらに検討する必要があるが、かりにPaterの主張が正しいとすると、サイクルによる強勢の説明そのものが疑わしいことになる。なぜなら、一般に理論はまず無標の事実(この場合 (4))を説明するために作られるべきであるが、この (4) はサイクルの存在を否定する例だからである。実際以下で紹介する最適理論やSainz (1992), Burzio (1994) などではサイクルを用いずに強勢を付与する分析法を提案している。このように、(3) と (4) のどちらを無標にするかは理論の枠を決定する重要な事項である。

最後にHalle & Kenstowicz (1991) (以下H&K)の分析について簡単に触れておく必要がある。H&Kは理論的にはH&Vと同じ格子理論の枠に入るが、(1a) や (3) に対して内部サイクルを考えないという点でH&Vと異なる。H&Kがそのような考えに到った理由には(5)のような例の存在がある (H&K: 460)。(5) はこれ自体で単独の語であり、派生語ではない。したがって、もちろん (5) には内部サイクルも存在しない。しかし、それにもかかわらず、(5) は (1a) や (3) と同様、第1強勢の前の重音節に強勢が置かれている。まとめると、サイクルの有る無しにかかわらず第1強勢の前の重音節には強勢が現れる場合とそうでない場合があるということである。

(5) Hali'carnassus in'cantation in'carnation o'stentation

このような現実に対しH&Vが提案した方法とは、要するに、どの語の第2音節に強勢がくるかは予測不可能であり、これは語彙的(lexically)に決定されるというものである (H&K: 461)。つまり、(1a), (3), (5)の第2音節に強勢が有るのも、また(1b), (2), (4)の第2音節に強勢が無いのも、すべてレキシコンにおいて語彙的に指定されていると考えるのである。すべてが語彙的に指定されるのであるから、サイクルを用いるときの問題(すなわち、condensationとinformationの扱いの矛盾)などは当然生じない。しかし、そうは言っても、強勢の付与を完全に語彙指定に任せるというこのようなやり方が最善の策だとはとても思えない。⁷ H&KがH&V、ひいてはSPEより進化したとは言いがたい理由はここにある。

3. 最適理論

現在音韻のあらゆる分野で最適理論を用いた分析が盛んに行われていることは周知の事実である。強勢付与においてもそれは例外でない。ただし、最適理論においても普遍性の問題が重要な課題であり、したがって英語だけを扱った研究は少ない。それでもPater (1995), Hammond (1999), Kager (1999) の中に英語の分析を垣間見ることができる。とくにPater (1995) は扱うデータが広範であり、かつ分析の仕方も明快であることから、最適理論の強勢分析を知る上で最も適していると思われる。以下ではおもにPaterの分析を取り上げ、それがSPE時代の分析よりも進化したかどうかを検討する。

Pater (1995) の分析は最適理論の枠の中で行われているのであるから、当然新しい制約 (constraint) の提示とその制約間のランキングが主たる課題となるが、それ以外に、Paterの事実観察にも注目すべき点がある。Paterは強勢保持をする語と保持しない語を語頭の音節連鎖と、その音連鎖の重さによって分類した (Pater 1995: 2)。⁸

(6) #HHでかつ強勢保持される音節が共鳴音 (sonorant) で終わっている場合

- a. 保持: ad'vantageous < ad'vantage con'demnation < con'demn con'densation < con'dense
- b. 保持なし: information < in'form lamentation < la'ment conservation < con'serve

(7) #LLLでかつ強勢保持される音節が開音節 (open syllable) の場合

保持: di'visibility < di'visible i'magination < i'maginate o'riginality < o'riginal

最適理論の特徴はそれが制約の集合体であるということと、その制約をランキングという形で順序付けたことにある。Pater自身も (6) と (7) の分布を説明のためにいくつかの制約を仮定している。その制約とランキングは以下に示すとおりである (Pater 1995: 23)。

(8) STRESS IDENT- γ > STRESS WELL > STRESS IDENT > ALIGN-LEFT

Input: condensation information imagination	STRESS IDENT- γ	STRESS WELL	STRESS IDENT	ALIGN- LEFT
(ˈcondn)(ˈsa)tion	* !		*	
(ˈcon)(ˈden)(ˈsa)tion ←		*		
(ˈinfr)(ˈma)tion ←			*	
(ˈin)(ˈfor)(ˈma)tion		(* !)		
i(ˈmagi)(ˈna)tion ←				*
(ˈima)gi(ˈna)tion	(* !)		* !	

(8) では四つの制約が相互に関与しているが、ここではとくに STRESS IDENT- γ に焦点を当てて検討をする。⁹ この制約はSTRESS IDENT (入力の強勢位置と出力の強勢位置の一致を要求する制約) に似てはいるが、実態は全く別物である。¹⁰ これが意味するところは、 γ 指定された派生語 (condensation) の強勢位置は基底となる語 (condense) の強勢位置と一致しなければならない、というものである。¹¹ 一方、 γ 指定されないinformationの場合はSTRESS IDENT- γ の適用を受けず、基底 (inform) の強勢を保持する必要がなくなる。このおかげで、informationはcondensationと違い、第2音節に強勢を与えられない。ちなみに、STRESS IDENT- γ はSTRESS IDENTで処理できない場合の周辺の制約であり、あまり好ましくない制約である。というのも、これがあるおかげで制約の体系が一層複雑になるからである。また、このような周辺の制約が適用される例も周辺の制約であると言える。したがって、Paterがcondensationのような例を有標と見なしているのは明らかである。この点は2節で述べたHalle & Vergnaud (1987) の見解と大きく異なる。

Pater (1995) は語の強勢付与に際し、派生すなわちサイクルを用いることはしない。これは派生そのものを否定する最適理論からすれば当然の帰結であろう。しかし、問題は、そのような理論が果たしてSPE時代からの課題であるcondensationとcompensationの対立を解決できたか、ということである。答えは否と言わざるを得ない。Pater自身は、それぞれの語彙はレキシコンの中で[+ γ]であるか[- γ]であるかが指定されており、これに基づいてSTRESS IDENT- γ の適用が決定されると主張する。しかし、このような方法が何の解決にもならないことは明らかであろう。なぜなら、[+ γ]と[- γ]の指定は一体何によって決まるのかという疑問が次に待っているからである。もちろん、condensationとcompensationのCV構造を頼りにSTRESS IDENT- γ の適用・不適用が決定されるわけでもないことは、すでに何度も述べたとおりである。

しかし、かりにこのようなSTRESS IDENT- γ の存在を認めたとしても、問題はほかにもある。そもそもSTRESS IDENTやSTRESS IDENT- γ は基底となる語の強勢を保持するための制約であるが、その基底となる語自体の強勢はどのような形で付与され、また、どのような形で入力の中に記号化されるのだろうか。Pater自身は述べていないが、これらの制約を活かすためには、たとえばcondensationやimaginationの入力に /con'densation/, /i'magination/ のようにはじめから基底語 (con'dense, i'magine) の強勢を書き込む必要がある。しかし、このような考えはまさにサイクルの考えそのものである。したがって、この点で言えば、基底語から派生語へと段階的に強勢を導くサイクル的手法のほうがPaterの分析よりも理にかなっていると言える。以上のことから、少なくとも本論で扱っている強勢付与に関しては、最適理論がそれ以前の理論よりも進化したとは言えない。

4. その他の分析: Sainz(1992), Burzio(1994)

この節では上で見た分析以外で、さらに検討に値する分析を二つ紹介する。一つはSainz (1992) であり、もう一つはBurzio (1994) である。両者とも格子あるいはフットという従来からある音韻論の道具を用いてはいるが、発想が独創的であり、それが属する各理論のいわゆる標準的な分析からはかなりかけ離れている点で特筆に価する。

Sainz (1992) は結論から言えば、サイクルを認めない。つまり、派生による強勢付与は認めない。Sainzがそう考えるに至った理由は二つある。一つは、基底の強勢位置を保持しない派生語 (9) がそれを保持する派生語 (10) と同じぐらい多数存在することに着目したからである。強勢を保持しなければサイクルは必要ないというわけである。Sainzが挙げている例の一部を下に示す (Sainz 1992: 130, 144)。¹²

- (9) preservation < pre'serve usurpation < u'surp information < in'form
 lamentation < la'ment observation < ob'serve reformation < re'form
- (10) con'densation < con'dense ex'pectation < ex'pect im'partation < im'part
 e'longation < e'longate in'formality < in'formal i'nactivity < i'nactive

もう一つの理由は、サイクルを用いなくても自ら構築した強勢の規則群で派生語の強勢は計算できると考えたからである。サイクルを認めないのであるから、強勢規則は派生語全体に一度だけ適用されることになる。¹³ 規則の中には重音節に強勢を置く Heavy Syllable Stress Rule (HSSR) が含まれており、(10) の語はもちろんのこと、強勢を保持しない(9) の第2音節にも一旦強勢を付与する。その上で、(9) の語の下線部分には第1強勢の前の強勢を削除する語中強勢削除規則 Medial Prestress Destressing (MPD) を適用するのである。もとより、(10) にはその規則を適用しない。

1節で述べたように、SPEにはcondensationとcompensationの区別はできるが、(9) と (10) の区別をすることはできなかった。そこでSPEは (9) に対して内部サイクルを認めないという一種場当たり的な方法を採用したのであった。問題はこのSPEのやり方と上記Sainzの (9), (10) に対する処理法を比較した場合、Sainzのほうがより優れているかということである。答えはここでも否である。理由はこれまでと全く同じである。(9) に語中削除規則 (MPD) を適用し、(10) にMPDを適用しない積極的な根拠がSainz (1992) の中に見出せないからである。ちなみに、Sainzは語中に強勢のないcompensationタイプの語に対しても重音節強勢規則 (HSSR) を適用し、さらにその後でMPDによって今与えた強勢を削除するという方法を採用。しかし、このような方法は2度手間であり、SPE流にサイクルを考慮に入れ、compensationの第2音節にははじめから強勢がないことを示したほうが直感に合い、説得力がある。

Burzio (1994) もSainz (1992) 同様、サイクルを認めない。したがって、Burzioの枠ではcondensationもcompensationも、そしてinformationも皆内部サイクルをもたない。しかし、このことだけなら、これまで見てきた最適理論やSainz (1992) と変わりはないが、Burzio (1994) の特異性は母音の質と強勢の有無を直接結び付けない点にある。具体的には、condensationの第2母音 /e/ が完全母音 (full vowel) であることと、その母音に強勢が置かれていることには、なんら関連性はないとした点である。同様に、compensationとinformationの第2母音が弱母音 (reduced vowel) であることと、その母音に強勢が置かれないうことにも、関連性はないとした。なぜBurzioがこのように考えるかと言うと、Burzio(1994)の枠を採用すれば、ここに挙げた語の第2母音に強勢を与えることができないからである。というのも、Burzioはたとえ重音節 (heavy syllable) であっても音節一つに対してフット一つを与える(このようなフットをdegenerate footと呼ぶ) ことを許さないからである。言い換えれば、(H) というフットを認めないのである (Burzio 1994: 112)。¹⁴

では、強勢の有無ではない、どのような方法で母音の質を決定するのであろうか。それに対し、Burzioは、派生語においては基底となる語の母音の質が保持されると主張する。確かにこの提案に基づけば、condensationとcompensationの第2母音の質の違いは説明できる。なぜなら、前者において基底となるcondenseの第2母音は完全母音であり、後者において基底となるcompensateの第2母音は弱母音であるからである。しかし、問題はinformationである。informationの場合基底となる語はinformであり、その第2母音は完全母音である。これに対しinformationの第2母音は弱母音である。このような事実は、派生語の母音は基底の母音の質を保持するというBurzioの説を疑わしいものとする。しかし、問題の根はさらに深い。つまり、サイクル (=派生) を用いないBurzioの分析で、内側のサイクルにある語の母音の質をどのような形で派生語に書き込むことができるのか、という問題である。この点に関するBurzioの

考えが不明である。以上のことから、Burzio (1994) の説明はinformationタイプの語を例外と見なす点でSPE流の説明と変わりはなく、したがって、Burzio (1994) がSPEより進化したとは言い難い。

派生を考えないということ言えば、Burzioは次のような語に対しても内部サイクルを認めないで強勢を付与する (Burzio 1994: 184)。

- (11) per'sonification < per'sonify as'similability < as'similable as'sociativity < as'sociative
 (12) ac'celeration < ac'celerate he'reditarian < he'reditary bac'teriodal < bac'teriod

Burzioが可能なフットとして ($H\sigma$), ($\sigma L\sigma$), ($L\sigma$) の3種類を認めていることはすでに述べた (注14参照)。そこで (11) に対しては、per(sonifi)cation ($=\sigma L\sigma$) を仮定し、(12) に対してはac(cele)ration ($=L\sigma$) を仮定して正しい強勢型を導こうとする。¹⁵ しかし、可能性から言えば、前者にはper(soni)fication ($=L\sigma$) もあり得、また後者には(accele)ration ($=\sigma L\sigma$) もあり得るはずである。この場合、とくにaccelerationが問題で、($\sigma L\sigma$) の型は誤った強勢型 'accelerationを生じさせる。Burzioは、このような事態を招かないように、フットの型が接尾辞によって語彙的 (lexically) に決定されると仮定した。しかし、(11), (12) に見るように、同じ接尾辞 -ationであっても異なるフット構築が要求される場合、このような語彙に頼る方法はかえって理論がもつ予測性を損なうことになる。もっとも、per(sonifi)caitonやac(cele)rationに書かれているフットは、そもそも基底となるper'sonifyとac'celerateの強勢を保持するために作ったフットであることには間違いないのだから、Burzioが何らかの形でSPE流のサイクルを活用したならば、語彙な指定 (lexically specified) などに頼らなくても済んだかもしれない。いずれにしても、サイクルを用いないBurzio (1994) がサイクルを用いるSPEよりも事実分析の面で進化したとは言えない。

5. まとめ

本論は強勢付与という観点から、現在の分析が過去の分析を凌駕しているか、という問題に取り組んだ。具体的な手順としては、1960年代後半のSPEから現在の最適理論までを概観し、サイクルを用いた分析がサイクルを用いない分析よりも優っているかどうかを検討した。結論として、SPEで指摘された問題 (すなわち、condensationと同じ派生過程、同じCV構造をもつinformationをどのようにしてcondensationと区別するかという問題) はその後の理論・分析においてもやはり問題であることがわかった。つまり、現在の理論が過去のものに比べて進化したとは言えないという結論に至ったのである。もちろん、理論と理論を比較する場合、単に強勢付与、それも極限られた範囲での強勢付与のみを俎上にのせ議論することは公平さを欠くであろう。しかし、これから英語の強勢を研究する若い人々が、本論を一読して、新しい理論の出現が必ずしも理論の進歩・発展につながらないことを理解してもらったならば、本論の目的は十分達成されたと言えるであろう。

注

1) 標準理論の中にはSPEのほかにHalle & Keyser (1971), Ross (1972) などが代表的な研究として含まれる。

2) 本論では強勢の有無とその位置にのみ関心があることから、その強勢が第1強勢であるか第2強勢であるかについては特別の理由がない限り言及しない。

3) ここではサイクルの概略がわかれば十分である。第1サイクルの強勢を第2サイクルで引き継ぐための具体的な規則適用に関してはSPE: 116-117などを参照。

4) これはつまり、軽音節には強勢削除規則が適用されやすいということを意味する。実際、次のような例はそれが正しいことを予感させる。

referent (<re'fer) confident (<con'fide) resident (<re'side) excellent (<ex'cel)

5) H&Vは原理とパラメターの理論あるいは韻律理論とも呼ばれることがあるが、本論では強勢のみを扱うことから、その理論を格子理論と呼ぶ。

6) ここでもう一度念を押しておかなければならないが、H&VがSPEより進化していない言っても、それはサイクルの観点からだけの結論であって、すべての面でH&VがSPEと同様あるいは劣ると言っているわけではない。本論の目的は、あくまで強勢にまつわる、中でもサイクルにまつわるSPEの問題が、他の理論では処理できたかどうかを論じることである。

7) ここで強勢付与とっているのは、あくまで第2強勢以下の強勢 (subsidiary stress) の付与の仕方であって、第1強勢の付与ではない。第1強勢の位置に関しては、どの理論もそうであるように、H&Kもまた語彙指定という手段をとらなくて、規則によって予測することが可能である。

8) 音節の構造によって強勢保持の有無を分類している箇所はこの他にもある (Pater 1994: 24)。しかし、そこで扱われている例はどの理論を用いても説明可能な例であり、本論ではこれをとくに問題扱いしない。

9) (8)において、出力の候補はフットをもち、そのフットが二音節の場合強弱格が与えられる。また、STRESS WELLは強勢が隣接することを避ける制約であり、ALIGN-LEFTはフットが語の左端になければならないことを規定する制約である。

10) ただし後でも述べるように、(8)には入力**の**強勢位置が示されておらず、したがって、Paterが入力と出力の強勢位置の一致・不一致をどのようにして確認するかはわからない。いずれにしても、このSTRESS IDENTという制約は、i'maginationの第2音節の強勢がi'magineの第2音節の強勢を保持しなければならないことを要求しており、その要求を満たしていない(ima)gi(na)tionを排除する役割を果たす。

11) なぜこの制約がi'maginationには適用されないかと言えば、この語が基底 (imagine) から引き継ぐ強勢の音節が重音節ではないからである。STRESS IDENT- γ は重音節に強勢が置かれている場合しか適用されないのである。なお、(8)の(*)はこの制約が適用されてもされなくても結果は同じであることを示す。

12) Sainzがサイクルを支持しない例として挙げた例の中にはそれにふさわしくない例も含まれている。たとえば, adversary, emendate, advertiseなどを基底語 (adverse, emend, advert) の強勢を保持しない例として挙げているが (Sainz 1992: 83), これらの語は基底の語強勢を保持する強勢型も有する。

13) 詳しい派生の仕方についてはP.131などを参照。

14) (H) を認めれば, condensationとcompensationの第2音節は両方とも (H) となり, 両方とも同じようにその音節に強勢を付与せざるを得なくなる。その結果, 両者を区別できなくなる。また, Burzioが英語に対して認めているフットは (H σ), (σ L σ), (L σ) の3種類だけであるが (Burzio 1994: 165), もし (H) を認めるとそれだけフットの体系が複雑になるばかりか, 一般に好ましくないとされる一音節フット (degenerate foot) をも認める結果となってしまう。

15) Burzio (1994) では, すべてのフットは左端の音節に強勢をもつと規定されている。

参考文献

- Burzio, Luigi. 1994. *Principles of English Stress*. Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. 1968. *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- Chomsky, Noam, Morris Halle and Fred Lukoff. 1956. "On accent and juncture in English." In *For Roman Jakobson*, 65-80. The Hague: Mouton.
- Cole, Jennifer. 1995. "The cycle in phonology." In John A. Goldsmith (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*: 70-113.
- Fudge, Erik. 1984. *English Word Stress*. London: George Allen & Unwin.
- Halle, Morris and Jean-Roger Vergnaud. 1987. *An Essay on Stress*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Halle, Morris and Michael Kenstowicz. 1991. "The free element condition and cyclic versus noncyclic stress. *LI* 22: 457-501.
- Halle, Morris and Samuel Jay Keyser. 1971. *English Stress: Its form, its growth, and its role in verse*. New York: Harper and Row.
- Hammond, Michael. 1989. "Cyclic stress and accent in English." In E. J. Fee and K. Hunt (eds.), *Proceedings of WCCFL* 8: 139-153.
- Hammond, Michael. 1999. *The Phonology of English*. Oxford University Press.
- 原口庄輔. 1994. 『音韻論』 開拓社.
- Hayes, Bruce. 1984. "The phonology of rhythm in English." *LI* 13: 227-276.
- Kager, René. 1989. *A Metrical Theory of Stress and Destressing in English and Dutch*. Dordrecht: Foris Publications
- Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge University Press.
- Kenstowicz, Michael. 1994. *Phonology in Generative Grammar*. Cambridge, MA: Blackwell.
- Kenstowicz, Michael and Charles Kisseberth. 1977. *Topics in Phonological Theory*. New York: Academic Press.
- Kiparsky, Paul. 1979. "Metrical structure assignment is cyclic." *LI* 10: 421-441.
- Kiparsky, Paul. 1985. "Some consequences of lexical phonology." *Phonology* 2: 85-138.
- Pater, Joe. 1995. "On the nonuniformity of weight-to-stress and stress preservation effects in English." Ms, McGill University.
- Prince, Alan. 1983. "Relating to the grid." *LI* 14: 19-100.
- Ross, John Robert. 1972. "A reanalysis of English word stress, part I." In Brame, M. (ed.) *Contributions to Generative Phonology*, 29-323. Austin, Texas: Univ. of Texas Press.
- Sainz, Susana. 1992. *A Noncyclic Approach to the Lexical Phonology of English*. Doctoral dissertation, Cornell University.